

## 幼児のソシオメトリー 4 群における社会的コンピテンスの研究

姜 娜\*

### The relationships between the sociometric status and social competence in Japanese preschool children

JIANG Na

#### Abstract

The present study examined 240 preschoolers of 8 classes (3yrs to 5yrs; boys =125; girls =115) using nomination sociometric test, and 4 social status groups, popular, rejected, neglected and average, were identified. Meanwhile, the social competence of each preschooler was rated by 8 teachers of their classes, resulting in 4 composite competence subcategories (initiative competence, cooperative competence, leadership competence, competence in relationship with adults). 173 parents of the children (boys =95; girls =78; M=56.98 (SD=10.39) months old, range 41~77 months old) answered questionnaires, regarding the mothers' mental health and the temperament of the children, and the playing experience with peers before entering kindergarten. ANOVA and multiple linear regression analysis were conducted. The children of the rejected group show lowest competence in cooperation. Peer initiative competence and cooperative competence positively correlate with preschool children.

Keyword : preschool children, sociometric status, social competence, peer, sociometric test

#### 問題と目的

近年、幼児の仲間関係における社会的コンピテンス (social competence) の発達に関して、その規定要因やその後の社会的適応との関連性などについて多くの研究が行われている。社会的コンピテンスに関しては、研究者により様々な定義をつけられている。Dodge (1986)、Gresham (1981)、Strayer (1989) など多くの研究から得られた知見にもとづき、Rubinら (1992) は、社会的コンピテンスとは、「社会的相互作用において個人の目標を達成すると同時に、時間を越え、状況を渡ってポジティブな関係を維持することのできる能力である」と定義した。つまり、社会的コンピテンスとは、さまざまな対人的状況において、社会的に是認された方法を用いて効果的な相互交渉を行う能力である。木下 (1982) は Malley, J. M. (1977) に従って、社会的にコンピテントであるということは、「子ども、仲間、大人の間の生産的で互いに満足させあう相互交渉」が持てることと意味づけている。

気分のむらがなく穏やかな気質をもち、敏感で応答的な親に育てられ、乳幼児期における重大なストレスや危機がない、ということが同時に生じていると、安定した親子の愛着関係が発達し、これらの安定した基本的な関係性が子どもの社会的・情緒的適応の発達に影響すると仮定する内的作業モデル (internal working model,

---

キーワード：幼児 ソシオメトリー地位 社会的コンピテンス 仲間 ソシオメトリック・テスト

\*平成14年度生 人間発達科学専攻

Bretherton & Waters, 1985) は、新奇な環境へ入った場合に、子どもに安全と信頼という感覚を与え、仲間環境を探索し、仲間との健全な相互作用が結べるように機能している。仲間との相互作用の中で、子どもは考えや見方、役割、行為の対人間でのやりとりを経験する。また社会的交渉や議論、仲間との葛藤から、子どもは他者の考えや情緒、動機、意図を理解することを学ぶ。これらの社会-認知的能力の発達には社会的に有能な子どもを生み出すと考えられる (Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. 1998)。Howes (1987) は社会コンピテンス (対人的困難さ、引っ込み思案、社交性など) に関する各評定値が年齢を通じて一貫していると示し、社会的コンピテンスの個人差は安定していると主張している。さらに仲間との困難が子どもにとって、後の心理学的問題を発達させるリスクとなることを示す証拠が多く挙げられている。しかし、日本では幼児が集団の中における適応の指標となるソシオメトリーと社会的コンピテンスとの関連の研究が少ないだけでなく、幼児におけるソシオメトリー研究そのものがほとんど行われていない現状である。そこで、本研究では、日本の幼稚園児を対象に、ソシオメトリック・テストを実施し、幼児の仲間集団の中での社会的地位を現すソシオメトリーと社会的コンピテンスとの関連を明らかにすることを目的とする。

研究の流れと意義

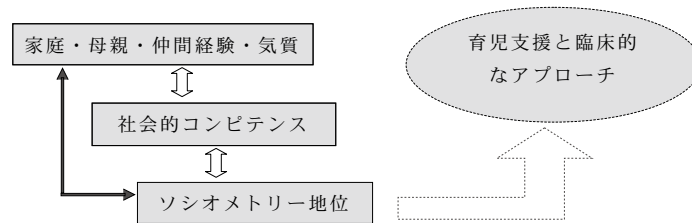


図1

## 方法

### 1. ソシオメトリック・テスト

調査時期と対象：2001年7月上旬～中旬、都内の幼稚園で年少、年中、年長クラス1クラスの中からランダムに選ばれた園児に対してソシオメトリック・テストの予備調査を行った。年少組は3名、年中組は24名、年長組は20名、計47名の園児をソシオメトリック・テストの対象とした。本調査の進め方や被験児への対応やソシオメトリック・テストの手続きに関しては、「子どもとのやり取りに問題がないか」、「テストの手続きに不備がないか」を予備調査の結果をもとに確かめ、修正を行った。本調査は2001年9月下旬～10月下旬に実施した。この時期は、年少クラスの園児でも幼稚園に入園して半年ぐらい経ち、各組の子ども同士でお互いに良く知っている時期だと考えられる。被験児は、筆者が半年にわたって観察を続けた幼稚園の8クラスの240名園児である (男児125名、女児115名)。年少は4クラス、年中と年長は2クラスずつである。ソシオメトリック・テストの実施は、筆者と発達臨床心理学コースの大学院生2名によって行われた。

手続き：筆者が事前に各組の担当の先生に背の順で付けられた出席番号が振られた名簿と各組の園児たち全員が映っている大きめの集合写真を借りて、園児たちが写っている順番に出席番号を先生にB5の紙に振ってもらおう。自由遊び時間の時、筆者がタイミングを見て個別にクラスの園児に声を掛け、被験児にクラスの集合写真を見せながら、自分が写っているところを指さしてもらいながら、被験児の発話の特徴を把握すると同時に、ラポールを作ること心掛けた。年少クラスの園児がお友だちの名前を独自の呼び方で呼び合ったり、言葉が聞きづらかったりすることが考えられるので、ソシオメトリック・テストを実施する際に、指名する子どもが写っているところを指さしてもらい、テスト検査者がB5の紙に記された出席番号と名前をその場で確認し確定することができる。被験児が所属するクラスの全員に、自由遊びの時間に誰と一緒に遊びたいか、また誰と一緒に遊びたくないかを尋ねた。クラス全員が写っている写真を被験児に見せながら、被験児に回答数を制限せず自由に答えてもらった。ソシオメトリック・テストの手続きの中で、子どもへの影響を十分配慮し、「遊びたくない子」

などの質問の後、無関係の楽しいことを尋ねて気分よく終えた。また、実験後担任に何か問題が生じていないかどうか（いじめなど）に気を付けてもらうようにした。

Table. 1はソシオメトリック・テストを受けた被験児の性別と各クラス・組の人数の内訳である。クラスの人数は最小22名、最大37名であった。

選択数と排斥数について、各組ごとに認められた特徴は次の通りである。

年少組では、4クラスの105名の園児のうち、選択数については、無回答が5名、誰も選択しなかった園児は1名、1～5人のお友だちを選択した園児は94名、6～9人のお友だちを選択していた園児は5名であった。また、排斥数については、無回答が10名、誰も選択しなかった園児は20名、1～3人のお友だちを選択した園児は75名であった。

年中組では、2クラスの73名の園児のうち、選択数については、無回答の2名を除いて、1～3人のお友だちを選択した園児は67名、4～5人のお友だちを選択した園児は4名であった。または排斥数については、無回答が4名、誰も選択しなかった園児は15名、1人のお友だちの名前を挙げた園児は50名、2～3人のお友だちの名前を挙げた園児は3名であった。また、クラスのお友だち16人の名前を挙げた園児が1名いた。

年長組では、2クラスの62名の園児の全員より、「自由遊びの時間に一緒に遊びたいお友だち」について選択の回答を得られた。そのうち、1～5人のお友だちを選択した園児は59名だった。6人のお友だちの名前を挙げた園児は2名であり、クラス全員の名前を挙げた園児1名いた。排斥数については、無回答が2名、1～4人のお友だちを選択した園児が45名、5～9人のお友だちの名前を挙げた園児は3名、クラスの異性の全員（15名と17名）を選択した園児が2名であった。また、クラスの中の数名のお友だちを除いて、残りの全員と遊びたくないという回答した園児が1名いた。

被選択数、被排斥数、及び被選択数と被排斥数の差引地位CRSの記述統計量はTable. 2に示す通りである。

被選択数から被排斥数を引き、ソシオメトリック差引地位をクラス毎にまとめた。結果はTable. 3に示す。年少クラスでは、クラスのサイズは22名～28名であり、差引数値は-3～6であった。年中クラスでは、クラスのサイズはそれぞれ36名と37名であり、差引数値は-3～5であった。年長クラスでは、クラスのサイズはそれぞれ30名と30名であり、差引数値は-8～5であり、数値のレンジがもっとも大きかった。

## 2. 社会的コンピテンスの測定

8クラスの担任教師より社会的コンピテンスチェックリストを記入してもらい、「自由遊びでは輪の外で見て

Table. 1 ソシオメトリック・テスト実施クラスのクロス表 (n=240)

	学年											
	年少					年中			年長			
	1組	2組	3組	4組	N	1組	2組	N	1組	2組	N	
男児	13	14	15	15	57	20	20	40	15	13	28	
女児	9	14	12	13	48	16	17	33	17	17	34	
合計	22	28	27	28	105	36	37	73	32	30	62	

Table. 2 被選択数・被排斥数・差引地位の記述統計量 (クラス別)

	クラス								
	年少			年中			年長		
	M	SD	RANGE	M	SD	RANGE	M	SD	RANGE
被選択数	2.21	1.75	0-6	1.48	1.39	0-6	2.63	1.53	0-7
被排斥数	1.00	1.11	0-5	0.75	1.03	0-5	1.61	1.88	0-8
差引地位	1.21	1.87	-3~6	0.70	1.53	-3~5	1.02	2.61	-8~5

いることが多い]、「仲間との接触を好む」など28項目について5件法で評価してもらった(1:まったく当てはまらない、2:あまり当てはまらない、3:やや当てはまる、4:当てはまる、5:非常に当てはまる)。因子分析の結果、最終的に18項目を再度因子分析に掛け、柴田とほぼ同じ因子構造を確認することができた。「仲間参加」、「協調性」、「主導性」、「対大人関係」の4つの社会的コンピテンスの下位尺度を得られた(柴田、1993; 東ら、1992)。

3. 保護者と子どもの気質的な要因の調査

幼稚園の担当の先生に通じて、保護者に質問紙を一斉配布して一斉回収する形で、保護者へ質問紙調査を行った。主に親の養育態度(広利ら、1987)、心理的健康度(Rosenberg自尊感情とCES-D抑うつを指標にした)、園児の入園前の遊び経験及び園児の気質(菅原ら、1994)について尋ねた。8クラス240名の園児の中、173名の保護者から回答を得られた。

Table. 3 各クラス被選択数と被排斥数の差引地位 CRS

		CRS															
		-8	-7	-6	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	5	6	7
年少クラス																	
1組	n							1	1	4	3	7	3	3	-	-	-
(n=22)	(%)							4.5	4.5	18.2	13.6	31.8	13.6	13.6	-	-	-
2組	n							-	-	4	4	8	5	4	2	1	-
(n=28)	(%)							-	-	14.3	14.3	28.6	17.9	14.3	7.1	3.6	-
3組	n							1	1	2	12	2	3	2	2	1	1
(n=27)	(%)							3.7	3.7	7.4	44.4	7.4	11.1	7.4	7.4	3.7	3.7
4組	n							1	-	1	5	6	8	1	3	2	1
(n=28)	(%)							3.6	-	3.6	17.9	21.4	28.6	3.6	10.7	7.1	3.6
年中クラス																	
1組	N							1	-	5	14	6	7	-	2	1	
(n=36)	(%)							2.8	-	13.9	38.9	16.7	19.4	-	5.6	2.8	
2組	N							1	1	4	12	8	8	1	2	-	
(n=37)	(%)							2.7	2.7	10.8	32.4	21.6	21.6	2.7	5.4	-	
年長クラス																	
1組	N	1	-	-	-	2	-	3	3	3	6	4	4	4	-	1	1
(n=32)	(%)	3.1	-	-	-	6.3	-	9.4	9.4	9.4	18.8	12.5	12.5	12.5	-	3.1	3.1
2組	N			1	-	-	1	-	2	5	6	10	3	1	1	-	-
(n=30)	(%)			3.3	-	-	3.3	-	6.7	16.7	20	33.3	10	3.3	3.3	-	-

## 分析と結果

## 1. ソシオメトリー 4 群

ソシオメトリーでは、選択数と排斥数を指定する手法によって社会地位指数を用いるのが一般的であるが、今回の研究では、被験児が年少クラス～年長クラスの幼児であるため、選択数と排斥数を限定することが不向きであると考えられる。そこで、社会地位指数を用いず、被選択数と被排斥数及び差引地位の平均値と度数パーセントについて検討した上、被選択数と被排斥数及び差引地位の指標を分析に使うことにした (Table. 2、Table. 3を参照)。各クラス・組の被験児の差引地位の表 (Table. 3) により、以下のように240名の被験児を4つのソシオメトリー群に分けた。

- (1) 人気群 (児) : CRS 差引地位が 3 以上の園児
- (2) 拒否群 (児) : CRS 差引地位が -1 以下の園児
- (3) 無視群 (児) : 被選択・被排斥ともに 0 の園児
- (4) 平均群 (児) : 上記(1)から(3)以外の園児

その結果、人気児は44名 (18.3%)、拒否児は41名 (17.1%)、無視児は27名 (11.3%)、平均児は128名 (53.3%)であった。ソシオメトリー 4 群の学年毎の人数は Table. 4 に示される。年少クラス (n=105) では、人気児は23名 (21.9%)、拒否児は16名 (15.2%)、無視児は11名 (10.5%)、平均児は55名 (52.4%)であった。年中クラス (n=73) では、人気児は6名 (8.2%)、拒否児は12名 (16.4%)、無視児は15名 (20.5%)、平均児は40名 (54.8%)であった。年長クラス (n=62) では、人気児は15名 (24.2%)、拒否児は13名 (21%)、無視児は1名 (1.6%)、平均児は33名 (53.2%)であった。

## 2. ソシオメトリー 4 群における男女差

ソシオメトリーについて、ノンパラメトリック  $\chi^2$  検定を行った結果、男児と女児に有意な差が見られた (Table. 5)。女児では人気児が男児より有意に多く、拒否児は有意に少ないことが分かった ( $\chi^2=2.90$ ,  $df=1$ ,  $p < .05$ ;  $\chi^2=8.81$ ,  $df=1$ ,  $p < .01$ )。

Table. 4 ソシオメトリー 4 群分け

	年少_n=105		年中_n=73		年長_n=62		合 計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
人気児	23	21.9	6	8.2	15	24.2	44	18.3
拒否児	16	15.2	12	16.4	13	21	41	17.1
無視児	11	10.5	15	20.5	1	1.6	27	11.3
平均児	55	52.4	40	54.8	33	53.2	128	53.3

Table. 5 男児と女児におけるソシオメトリー4群の  $\chi^2$  検定

	男児	女児	値	df
	(n=125)	(n=115)		
人気児	17	27	3.90*	1
拒否児	30	11	8.81**	1
無視児	13	14	.19	1
平均児	65	63	.19	1

\*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$

### 3. ソシオメトリーにおける発達差

240名の被験児のソシオメトリー地位についてクラス別に発達差を検討するために、ノンパラメトリック $\chi^2$ 検定を行い、年齢による差を調べた。結果はTable. 6に示される。拒否児と平均児は年齢による差は見られなかったが、人気児と無視児は年齢による差が見られた。年少クラスでは、人気児が多く、年中クラスでは無視児が有意に多かった。さらに、仲間に排斥される意味合いを示す被排斥数について、年齢との関連を検討するために、クラス間被排斥数の多重比較を行った。結果がTable. 7に示されるように、年少クラスと年中クラスより年長クラスは被排斥数が有意に多いことが分かった ( $\chi^2=7.30, df=2, p<.05$ ;  $\chi^2=12.15, df=2, p<.01$ )。

### 4. 社会的コンピテンスの下位尺度とソシオメトリー4群

年少～年長クラスの240名の被験児が所在する組の8名の担当の先生に記入してもらった社会的コンピテンスチェックリストによりそれぞれの園児について社会的コンピテンスの得点を得られた。因子が負荷している項目素点を合計して下位尺度の得点にした (Table. 8)。しかし、8人の担任が各組の園児について社会的コンピテンスの評価を付ける際、個人特有の評価の習性により各組の間に誤差が生じる可能性がある。Chen. et.al (2005)の研究と同じように、各組毎に園児の社会的コンピテンスを平均が0、標準偏差が1とする標準得点に変換して、ソシオメトリー4群の社会的コンピテンスの標準得点の平均値を検討した (図2)。人気児、拒否児、無視児、平均児のソシオメトリー4群における社会的コンピテンスの4つの下位尺度について、タイプIV平方和のモデルにより一元配置分散分析を行った。「主導性」と「対大人関係」においては、4群の間では有意差が見られなかったが、「協調性」のコンピテンスにおいては、有意差が見られた。 $F(3,236)=2.90, p<.05$  (Table. 9)。また、「仲間参加」のコンピテンスにおいては、4群の間では $p<.10$ 水準で差の有意傾向が見られた。

続いて、Tukey LSD法による多重比較を行った結果、人気児と平均児のほうはいずれも拒否児より「協調性」

Table. 6 クラスにおけるソシオメトリー4群の $\chi^2$ 検定

	年少 (n=105)	年中 (n=73)	年長 (n=62)	値	df
人気児	23	6	15	7.30*	2
拒否児	16	12	13	.93	2
無視児	11	15	1	12.15**	2
平均児	55	40	33	.10	2

\*  $p<.05$ ; \*\* $p<.01$

Table. 7 クラス間被排斥数の多重比較

	学年			比較
	年少	年中	年長	
年少	—	.219	-.613**	年少<年長
年中	-0.219	—	-.832**	年中<年長
年長	.613**	.832**	—	年長>年少 年長>年中

\*\*  $p<.01$

Table. 8 ソシオメトリー4群における社会的コンピテンスの平均値と標準偏差

項目数	人気児_n=44		拒否児_n=41		無視児_n=27		平均児_n=128		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
仲間参加	7	29.43	3.47	27.21	5.09	26.59	4.77	27.34	4.10
協調性	5	19.09	3.15	17.68	3.34	19.48	3.09	19.45	3.00
主導性	3	8.14	2.51	8.54	2.37	7.26	2.10	7.59	2.60
対大人関係	3	10.11	2.36	10.56	2.51	9.93	1.75	10.12	2.26

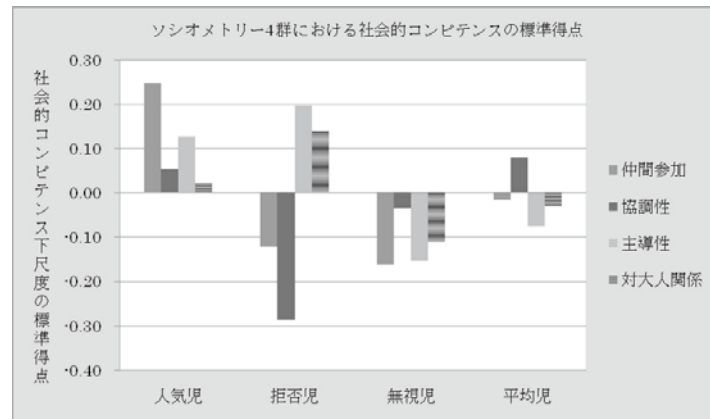


図 2

Table. 9 ソシオメトリー 4 群の社会的コンピテンス標準得点における分散分析

	平方和	df	F値	p	N = 240
仲間参加	3.42	3	2.30	†	
協調性	4.33	3	2.90	*	
主導性	3.68	3	1.93	n.s.	
対大人関係	1.25	3	0.66	n.s.	

\*  $p < .05$ ; †  $p < .10$

コンピテンスにおいて有意に高かったことが示された。多重比較の結果はTable.10に示される。また、「仲間参加」コンピテンスにおいては、人気児のほうは他の3群より  $p < .05$ 水準で有意に高く、他の3群の間では有意差がないことが分かった。多重比較の結果はTable.11に示される。

また、本研究で行われたソシオメトリック・テストでは、幼児の被験児には「一緒に遊びたいお友だち」と「一緒に遊びたくないお友達」について選択数と排斥数の数には制限を与えなかった。厳密に比較するために、Chen. et.al (2005)の研究と同じように、本研究では、差引地位CRSを標準化して、ソシオメトリーを各組毎に標準得点に変換した。さらに、このソシオメトリー地位標準得点を従属変数に、社会的コンピテンスの各下位尺度を説明変数としてステップワイズ法で重回帰分析を行った。結果はTable.12に示される。主導性と対大人関係のコンピテンスは園児のソシオメトリー地位との関連が有意ではなく、協調性と仲間参加のコンピテンスが有意に関連することが分かった。

### 考察

幼児のソシオメトリー地位において、発達差と性差が見られた。拒否児においては、年長クラスが年少・年中クラスより有意に多く、女児より男児のほうは有意に多かった。

また、男児では、年長クラスのほうは、年少・年中クラスより拒否児が有意に多い傾向が見られた。無視児においては、年中クラス女児のほうは年少・年中クラス女児より有意に多いことが示された。人気児においては、

Table.10 協調性における多重比較

			平均値の差	標準誤差	p
拒否児	>	人気児	-.3391	.1530	*
	>	平均児	-.3658	.1265	**

\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

Table.11 仲間参加における多重比較

			平均値の差	標準誤差	p
人気児	>	拒否児	.3737	.1635	*
	>	無視児	.4012	.1989	*
	>	平均児	.2685	.1319	*

\*  $p < .05$

Table.12 ソシオメトリー地位標準得点を従属変数とした重回帰分析の結果

説明変数	ソシオメトリー地位 n = 240	
	標準化係数 $\beta$	t値
協調性	.25***	3.7***
仲間参加	.15*	2.27*
R <sup>2</sup>	.08***	

\*\*\*  $p < .001$ ; \*  $p < .05$

女児のほうが男児より有意に多いことが示された ( $\chi^2=3.90$ ,  $df=1$ ,  $p < .05$ )。学年間被排斥数の分析では、年長クラスは年少と年中より被排斥数が多い結果が見られた。これによって、友だち関係が学年が上がるに連れて、親密さも増えると同時に、お互いにぶつかる度合いも増すことが示唆された。

ソシオメトリーと母親の質問紙と対応しての分析では、次の結果が挙げられる。平均児より、拒否児の母親のほうはより「自己否定感」が強く、より「拒否的な養育態度」をとる傾向が示された。また、子どもの「体質の虚弱性」において、拒否児は無視児より  $p < .05$  水準で有意に小さく、平均児よりも  $p < .10$  水準で有意に小さい傾向が見られた。無視児は平均児と比べ、母親の「感情的抑うつ」が有意に高い傾向が見られ、幼稚園に入園する前の「対人経験への母親の積極性」が有意に低い傾向が見られた。

仲間からの拒否は最も一般的に引用される行動的な相関要因は攻撃性であるといわれている。この結果は、攻撃性が仲間評価 (Carlson, Lahey, & Neepner, 1984; Cillessen, Ijzendoorn, 1992; French, 1988; Rubin, chen, & Hymel, 1993) や教師評定 (Coie & Kupersmidt, 1983; Dodge, 1983; French & Waas, 1985)、観察 (Coie & Kupersmidt, 1983) などによっても示される。Newcombら (1993) は、拒否児が、平均児や人気児、無視児と比べ、破壊・身体的攻撃・ネガティブな行動 (例えば、言語的な脅迫) という3つの攻撃形態において高いレベルを示すことを明らかにした。本研究では、協調性のコンピテンスにおいては、拒否児が人気児と平均児より有意に低かった。言い換えれば、仲間参加や主導性そして対大人関係のコンピテンスとは関係なく、協調性を欠いた攻撃的な幼児は仲間の中でもっとも拒否される対象となる。それは他の社会的コンピテンスよりも、協調性を欠いた攻撃的な行動特徴が仲間から気づかされやすいことを示唆し、攻撃性を変容させることが子どもの仲間関係や地位を改善するにつながると示唆する。

これまでの研究では引っ込み思案な子どもや攻撃的な子どもが対人関係に問題を抱えていることが報告されている (Ladd, 1981; Conger & Keane, 1981)。French (1988) らの研究で、攻撃性が拒否と関連する唯一の要因ではなく、詳細な分析では、攻撃的な子どもは拒否児集団の40~50%しか構成しておらず、非常に社会的引っ込み思案で、臆病で、用心深い子どもが、拒否集団の10~20%を占めることを一貫して報告してきた。ソシオメトリーの拒否される子どもを一つでなく、少なくとも「引っ込み思案タイプ」と「攻撃的タイプ」の2タイプに同定することは今や一般的なことである (French, 1988)。しかし、本研究では協調性を欠いた攻撃的な子どもだけが仲間拒否されている結果となった。この結果はRubin (1982b) の「引っ込み思案の幼稚園児はその仲間によって拒否はされていないようである」の結果が一致している。これは就学前の幼稚園児についての研究だからと言えよう。社会的引っ込み思案の現象が、幼児にとって特に顕著なものではないためとも言えるかもしれない。しかし、児童期中期や特に後期には、社会的引っ込み思案は仲間集団にとって顕著になり、加齢とと



もに、引っ込み思案の子どもが仲間集団の中で徐々に目立ち、拒否されることと考えられる。臨床的な意味では、例えば幼児期に攻撃的な子どものように仲間拒否されたりはしないとしても、今後学校に入ってから仲間関係における不適応を予防するために、攻撃的な子どもと同じく引っ込み思案のこどもに介入すべきだと示唆された。

## 文献

- Asher, S.R., Dodge, K.A. (1986): Identifying children who are rejected by their peers. *Developmental Psychology* 22 (4), 444-449.
- Alan Russell & Victoria Finnie (1990): Preschool children's social status and maternal instructions to assist group entry. *Developmental Psychology*, 26 (4), 603-611.
- 東敦子・野辺地正之 (1992) : 幼児の社会的問題解決能力に関する発達の研究—けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス. 教育心理学研究, 第40巻, 第1号, pp.64-72.
- Belsky, J., & Cassidy, J. (1984): The determinants of parenting: a process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Brian E. Vaughn & Muriel R. Azria; Lisa R. Caya; Wanda Newell; Lisa Krzysik, Kelly K. Bost; Kerry L. Kazura (2000): Friendship and social competence in a sample of preschool children attending Head Start. *Developmental Psychology*, 36 (3), 326-338.
- Chen, X., C.G., He, Y. (2005): Social functioning and adjustment in Chinese children: The imprint of historical time. *Child Development*, 76, 182-195.
- Chen.X, Liu.M, Li.D., Li.Z, & Li.B. (2000): Sociable and prosocial dimensions of social competence in Chinese children: common and unique contributions to social, academic, and psychological adjustment. *Developmental Psychology*, 36 (3), 302-314.
- Coie, J.D., Dodge, K.A., Coppotelli, H. (1983): "Dimensions and types of social status: a cross-age perspective" : correction. *Development Psychology*, 19 (2), 224.
- Cynthia A. Frosch, Sarah C. Mangelsdorf (2001): Marital behavior, parenting behavior, and multiple reports of preschoolers' behavior problems: mediation or moderation? *Developmental Psychology*, 37 (4), 502-519.
- Dodge, K.A., McClaskey, C.L., Feldman, E. (1985): Situational approach to the assessment of social competence in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53 (3), 344-353.
- French, D. C. (1988): Heterogeneity of peer rejected boys: aggressive and nonaggressive subtypes. *Child Development*, 59, 976-985.
- Goodman, Sherrul. H, Brogan, konna (1993): Social and emotional competence in children of depressed mothers. *Child Development*, 64 (2), 516-531.
- Greca, A. M. (1981): Peer acceptance: the correspondence between children's sociometric scores and teachers' ratings of peer interactions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 9, 167-178.
- 広利吉治・渡辺純・松本和雄 (1987) : 幼児の養育環境と集団適応及び心身症状—MS式養育態度診断検査および幼児集団適応評価尺度による—. 児童青年精神医学とその近接領域, 第35巻, 第5号, pp.501-518.
- 井上健治 (1992) : 人との関係の広がり. 木下芳子 (編), 新・児童心理学講座 対人関係と社会性の発達. pp.1-28. 金子書店.
- Kenneth A Dodge (1990): Developmental psychopathology in children of depressed mothers. *Developmental Psychology*, 26 (1), 3-6.
- Ladd, G. W. (2006): Peer rejection, aggressive or withdrawn behavior, and psychological maladjustment from ages 5 to 12: An examination of four predictive models. *Child Development*, 77 (4), 822-846.
- Ladd, G. W. (1981): Effectiveness of a social learning method for enhancing children's social interaction and peer acceptance. *Child Development*, 52 (1), 171-178.
- 前田健一 (1998) : 子どもの孤独感と行動特徴変化に関する縦断的研究—ソシオメトリック地位維持群と地位変動群の比較—. 教育心理学研究, 第46巻, 第4号, pp.377-386.
- 無藤隆・久保ゆかり・遠藤利彦 (1995) : 人の中への誕生と成長—親子関係から仲間関係へ. 現代心理学入門 発達心理学. pp.37-56. 岩波書店.
- Newcomb, A.F., Bukowski, W.M. (1983): Social impact and social preference as determinants of children's peer group status. *Developmental Psychology*, 19 (6), 856-867.
- Parker, J.G., & Asher, S.R. (1987): Peer relations and personal adjustment: are low accepted children at Risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.
- Rubin, K.H. (1998): Social and emotional development from a cultural perspective. *Developmental psychology*, 34 (4), 611-615.

姜 幼児のソシオメトリー4群における社会的コンピテンスの研究

- Rubin, K. H., Coplan, R. J., Fox, N. A., & Calkins, S. D. (1995): Emotionality, emotion regulations, and preschoolers' social adaptation. *Development and Psychopathology*, 7, 49-62.
- Rubin, K.H., Hymel, S., Mills, R.S. (1989): Sociability and social withdrawal in childhood: stability and outcomes. *Journal of personality*, 57 (2), 1989, 237-255.
- Rubin, K. H., Clark, M. L. (1983): Preschool teachers' ratings of behavioral problems: observational, sociometric, and social-cognitive correlates. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 11 (2), 273-285.
- Rubin, K. H. (1982): Nonsocial play in preschoolers: Necessarily evil? *Child Development*, 53 (3), 651-657.
- 柴田利男 (1995) : 仲間との対人経験が幼児の社会的コンピテンスに及ぼす影響. 教育心理学研究, 第43巻, 第1号, pp.85-93.
- 柴田利雄 (1993) : 幼児における社会的コンピテンスの諸測度間の相互関連性とその個人差. 発達心理学研究, 第4巻, 第1号, pp.60-68.
- 菅原ますみ・島悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則 (1994) : 乳幼児期にみられる行動特徴 : 日本語版RITQおよびTTSの検討. 日本教育心理学, 第42巻, 第3号, pp.315-323.